

木防己湯に木防己を用いる危険

藤平 健

木防己湯に使用する防己は漢防己と稱する黒いものを用うべきで、木防己と稱する白いものを用いても効果をあげる事は出来ない、とはかたがね恩師奥田先生から御教示を戴いていたところであつたが、最近偶然の事からこの事実を強く思い知らされる相續く二例の経験が寄せられたので、これを書いておく事は無駄ではないと考へ報告する事とした。

若葉のみどりも日増しに濃くなつて来た四月も末近い或る日、もう二ヶ月も前から診ていて、いつも一週間に受診箇所をとりて来ている心臓弁膜症の患者(男、36才)が、来院するや否や「先生この一週間はとても苦しくて困りました、薬を飲むと吐きそうになるし、昨夜などは思切れがひどくてとうとう注射をうって貰いました。今までの薬とは味も違う様ですが今度薬が交つたんですか」といふ訴えである。この患者は関節リウマチ罹患後の高度の弁膜症があつて、二ヶ月前に来院した当時は心悸亢進と思切れとが劇しく、特にそれが横臥によつて一層甚しくなるので、来院するまでの數ヶ月は毎夜何かにたれてまどろむ状態であつた。一日として横臥安眠した事がないといふのである。そのようになつて、はじめ来院した時も腹診するため仰臥させたところ、

忽ち劇しい思切れがして来たので忽ち腹診を切り上げたのであつた。心下硬滿、喘等があつて典型的な木防己湯証を呈しており、同湯の投与によつて諸症状は一日と好転して、横臥して眠れる様にもなり、非常に感謝されていた矢先に突如としてこの急変である。

早速寝合におけて精診してみると、他覚的には前週にくらべ大した変化はなく、依然木防己湯証である事に変わりはない。してみるとこゝで考えられる原因としては生活條件の変化か、薬方中の薬が何かの関係で変つたかのいずれかである。問いたゞしてみると食事その他の條件で最近特に變つてゐるものはないといふ。そうとすれば薬方中の薬品のいずれかゞ従来のもので變つたのだと推定する以外にはない。誰しもこゝで第一に考へるのは防己である。調劑糖に防己はどんなのが来ているのかと尋ねると「今度のは今までのと違つて馬鹿に白いので變だと思つていたので「今度の上」といふ返事である。アツと思つたが既に後のまつりである。薬品を仕入れた際にはいつもその良否を点検する事にしてはいたのだが、最近商店を信用してつい油断したのでこの失敗のもとであつた。みてみると案の定漢防己とは似ても似つかぬシロモノで、一見木通を思わせる生薬である。さて困つた、三日前に来た弁膜症の患者(女、50才)も木防己湯証で同湯を飲んで帰したがあの患者は一体どうなつてゐるだろうと心配になつて来た。すると翌日その患者の家族が来院し、「あの薬を二日服んだのですが、服むごとに苦しさが増すよう、とても氣の毒で見ていられますせん、あれを續けてのませてもよいものなのでしょうか」と訴えて

来た。その日のうちに漢防己が入手出来るように前日早速手配しておいたので、患者の家族には夕刻までに別の薬を届ける事を約束して帰宅させた。漢防己を用いてつづいた木防己湯を持つて夕刻その患者に向いた調劑糖から「患者さんがひどい呼吸困難でとても苦しんでおります、至急来て下さい」と電話がかゝつて来た。そこで持つて行つた木防己湯を煎じておく事を命じ、急救処置を用意して急ぎ往診してみると、なる程ひどい苦しみのようである。患者は折られたんでつみ重ねたふとんにつかまつて、油汗を顔に浮かせ乍らハアハアと辛うじて思つてゐる。途切れとぎれに語る所をきけば昨夜は何とも言えない苦しみのために一晩中部屋の中を這いずり廻つていたといふ。起座のまゝ腹診してみると心下は初診時よりも一層堅くなつてゐる。強く濁を訴えており、

脈は沈緊で、やはり木防己湯証である事に変わりはない。そこで間もなく樂になる事を告げ、さきに命じて煎じてあつた漢防己使用の木防己湯を大匙に一杯だけ服させた。時計をみてみると四分経過ぎた所で思つかいがズツと樂になつて来たので、「樂になりましたね」と言ふとコックリとうなずいて「おかげでやつと樂になつて来ました」とホツと安堵の様子である。更に残りの分の半分を与え、十五分経て呼吸困難もすつかり去つたので、残り二時間程経つたら服する様言ひ置いて辞去したのであつた。

以上相ついで起つた木防己湯中の防己に木防己を用いた爲に生じた失敗を通じて、次の二つの事実を確認する事が出来る。
一、木防己湯証を呈する患者に漢防己を用いた木防己湯を授けし場合には諸症状は明かに好転する。即ち第一例では漢防己を

用いていた場合は明かに好転していたし、第二例では木防己を用いて寧ろ悪化していた諸症状が、漢防己を用いる事により脱然として良転した。のみならずこれ以外の多數の例によつてもこの事実は明らかである。
二、木防己湯証を呈する患者に木防己を用いた木防己湯を授けし場合には、効果のないばかりではなく、諸症状は反つて悪化する場合がある。

さて防己に因つては古來諸説紛々として、今以つて定説のない有様であるが、然らばこの治験に於て症状を具載せしめた所謂漢防己と、症状を却つて憎悪せしめた所謂木防己とが、果して如何なる植物の如何なる部分であるのかをつきとめておく必要がある。同時に効果のないばかりか反つて悪化せしめる危険さもある所謂木防己と稱するものが、如何なるわけあいで漢防己と稱を並べて防己の座に平然と刺り込む次第と相成つたかを調べてみる必要がある。

先ず順序としてこの治験に使用した漢木二種の防己を供覽する必要があるが、それは出来ない相談であるので、簡単にそれらの形状をこゝに記述して御参考に供する事とする。私の使用した漢防己と稱するものは、横切面の直径2-3釐、外面は黒褐色で、粗糙で厚い黒褐色の袍層があり、木部は灰黒褐色で、放射状に排列する黒褐色の明瞭な紋理があり、一面に多數の導管が認められる。質は堅硬木質で、味は相當に苦い。

同様使用した木防己と稱する者は、横切面の直径〇、五-一、〇釐、外面は淡褐色で、極めて薄い淡黄褐色の袍層を被り、木部

は帶黄白色で、淡褐色の放射線状の髓線がある。紋理は学者程には明瞭ではない。一面に導管を認めるが、これも亦前者程には明瞭ではない。質は堅硬木質で、味は苦いが、これ亦前者の苦味に比すればはるかに少なく、ホロ苦い程度である。

この記述でわかる通り、この木防己と稱するものゝ外観は、木通と殆ど同じであつた。一見しては殆ど鑑別が困難である。しかし兩者を並べて比較してみると、木通の横切面の方が所謂木防己のそれよりはやく色が濃く、兩者をかみ比べてみると木通の方は味が全く淡白で些かの苦味もないのに反して、この木防己の方はホロ苦い味がある。従つてこれが木通でない事は確かだとみてよいと思ふ。

假てこゝで清水藤太郎氏の「漢方薬物学」に於ける防己のところを見てみよう。

(原) 原植物に異論多きも我國に於ては次の如く用ふ。

1. *Sinomenium acutum* (S. diversifolium) オホツツラフチ、ツツランチ、漢防己

山地に自生する多年生蔓草にして雌雄別株なり、全草に毛を有せず、莖は淡緑にして折れ難く葉は革質にして長柄あり、円形広卵形、腎臓形、広楕圓形にして脈々五七淺裂する等大小形状一定せず、葉面光沢あり、夏紅葉より黄緑色の小花を開き果實は球形にして黒熟す、根はナンタンノ幹の如き粗き横皺ありて横断面には顯著なる車輪線を認む、十月頃根を採集し枹屑を剝離し輪切りとなし日乾して漢防己と稱し、其莖を取り輪切りして木防己と稱し薬用とす。

正誤品あり。

アオツツランチには根及び莖を *Trilobin*, *Homotrilo-bin*, *Trilobamin* なるアルカロイドを含有す。(後略)

これをもつてみれば本治験に使用した漢防己は疑いもなくオホツツランチの根である。使用した木防己も亦引用文に記述の木防己の形状と全く一致するから、所謂木防己である事には間違いない。ところがこの清水氏の記述によれば、木防己にはオホツツランチの莖を輪切りにしたものとアオツツランチの根及び莖を輪切りにしたものとがあるわけだが形状の説明に當つてそのいずれの方の形状に就いて記述したのかを明らかにしていないので、従つてこの治験に使用した木防己が果してオホツツランチの莖であるのか、或はアオツツランチの根及び莖であるのかハッキリさせる事が出来ない。然し引用文の成分に関する記述によれば、オホツツランチの根及び木部は共に同一成分を含有しているのであるから、たとえ根と莖とはそれ以外の夫々異なるブラスンがあるとしても、之等を實際に用いた場合その效力の点に於てはさほど大きな差を呈する事は考えられない。ところがアオツツランチの成分に至つてはオホツツランチのそれとは全然違つているのである。従つて之を實際に用いた場合全然違つた効果を呈するであろう事も容易に想像し得る所である。これから推測して、私の用いた木防己と稱するものは恐らくアオツツランチの根及び莖ではなからうか。若しこの推測が正しいとするならば、臨床試験の結果に照して、オホツツランチの根は防己として使用して確かに有効であるが、アオツツランチの根及び莖は防己として使用して無効と

2. *Cocculus trilobus* アオツツランチ、木防己

山野に自生する多年生蔓草にして雌雄別株なり、全体に短毛ありて莖は濃緑色にして折れ易し、葉は有柄にして長心臟形又は心臟形三浅裂し葉面に光沢なし、夏紅葉より青白色の小花を開く、果實は稍々球形にして後碧黑色に成熟す、十月頃根及び木質の莖を採取し輪切りし日乾して木防己と稱し薬用とす。

漢防己木防己の原植物及び使用部分に關しては和産品に於ても異論甚だ多し、然れども関東地方に於てはオホツツランチの根を漢防己と稱し、莖を木防己とし、アオツツランチは織て木防己と稱するが如し。

(形) 漢防己は太さ一寸余多少屈曲し縱條又は横裂あり市販品は多くは輪切りにせられ直径五六分より一寸余に達す、外面灰黒褐色にして粗糙、黒褐色の厚き枹屑を被り横切面は類褐色にして顯著なる灰褐色の放射線状菊花紋理を現はす、質堅硬木質にして味苦し。

木防己は外面暗灰褐色にして黄褐色の比較的薄き枹屑を被り横切面は帶黄白色にして淡褐色の放射線状縱線ありて菊花紋理をなす、質堅硬木質にして味苦し。

(攪) 内部黄褐色にして菊花紋理あるを良とす、漢防己木防己共に関東地方に於てはオホツツランチより採取し其薬効大差なきが如し。

(或) オホツツランチには根及び木部共に *Sinomenin*, *Diat-nomenin*, *Acutamin*, *Sinacutin*, *Deyersin* なるアルカロイドを含有す、現今塩酸シノメニン及塩酸ハラシノメニンなる

ごちか、却つて有害であると結論する事が出来る。

では何故に反つて有害にならざるアオツツランチがオホツツランチと稱を並べて防己の座にすわりこむ次第になつたのであろうか。

牧野博士は「漢方と漢薬」第六卷第二号「不用なオホツツランチの名を斥け須らく其本名を以て之を呼ばし」と題する論文中に於て、

(前略) 松村任三博士の「改訂植物名彙」前編に據れば *Cocculus trilobus* DC. の漢名として木防己、青藤、鼓兒藤、青木香、青藤香、小青藤が挙げられてゐるが、其中で木防己は日本の本草家が充てた者で其実は中つていないのである(中略)

小野蘭山は *Cocculus trilobus* DC. 即ち誤稱のアオツツランチを支那の木防己と爲し、

Sinomenium diversifolium Diels. 即ちツツランチ(所謂オホツツランチ)を漢防己と爲してゐるが此点野田翠山も同様である。然し是れは兩學者とも其れは疑いも無く全く充て損ないを爲してゐると思ふ、何とならば元來防己が何んの植物だか能く判らぬから従つて其木防己も又漢防己も共に分りつこが無い筈で、今「本草綱目」などを讀んで見ても木防己も漢防己も共に何等具體的の記載が無いから其れが果して何んな枝葉花実を有つてゐる者か一向に明かにする事が出来なく只もう茫々乎として宛かも暗中に物を探るに似た觸があるばかりである。要するに防己とは何科に屬する何んな藤本であるのか今の所一切不明であるから之れを *Cocculus trilobus* DC. だ *Sinomenium*

Dioscorea oppositifolia Diels などとするのは実に此上もないよい加減な当りずしであること私は信ずる。(後略)

といつておられる。これをもちつてみても実験に臨床に用いてみて有言でなされる *Cocculus trilobus* が防己の座につくようになつた次第は、要するに木防己を和産の植物に充てるに際して日本の本草学者がそれを *Cocculus trilobus* に充て間違えた事に原因がある様で思われる。

では *Shonemium diversifolium* Diels をもつて漢防己に充てたのは間違ひなかつたのかといふ事が問題となるわけだが、前記論文に於て牧野博士は、

(前略)防己の図に就て検討してみると、『紹興校定經史証類備急本草』并びに『經史証類大綱本草』に出ている図に二つを以て其一は黔州防己、又其一は興化軍防己(『經史証類大綱本草』の方では興元府防己)と成つてゐる。そして此書の方では其根が要式でなく兩方とも根をた根に描いてある)である、即ち此兩図では明かに二種の植物である事を表わしている、そして其黔州防己は何と云ふ植物に當るか私には見当が附かないが、其興化軍防己(興元府防己)は強て比較すれば參朮として我がツツラフチ即ち所謂オホツツラフチに似通つた所があるとも謂えない事はないが、然かし確かりした事は固より言ふ限りの者ではない、此ツツラフチは支那の湖北省にも四川省にも在る様だからツイしたら或は其者であるかも知れない、興化軍は興化府の事で此地は支那東方の福建省に屬するのだが興元府は陝西省の南鄭縣に屬し四川省境から余り遠くない処に在る、『本草綱目』

(解 一)

木防己湯の防己は漢防己を用うべきで、木防己を用いてはいけない。というのが本稿の主旨で、問題は漢防己と木防己の區別である。この區別については昭和十七年四月発行の『漢方と漢薬』第一卷第九卷第四号、漢薬を語る座談会で論じられていたのでそれを抄録して参考に供したい。(編集部)

薬学博士・木村雄四郎氏の談 ツツラフチの原植物はむづかしく、こゝで決定的にはちよつと云えないが、私人の考えでは木防己といふのはアツツラフチの木部で、オホツツラフチの根を漢防己と云うのではないかと思ふ。其の型では區別しかねるがオホツツラフチは葉に毛が無いかからツツラフチがあり、アツツラフチは葉にも幹にも毛があるから植物そのものではすぐ區別出来る。つまり漢防己はオホツツラフチの根で、木防己はアツツラフチの根及び莖だといふことにしたい。然らば實際上どちらが効くかといふことになる、神經痛にはオホツツラフチが効くと思ふ、それはシノメニンを含んでゐるからである。然しアツツラフチにはシノメニンは含まずトリロビンを含んでいて、これは鎮痛作用はない。木防己と漢防己は生薬学的には藤田眞市博士もくわしく調べていられるが區別がむづかしい。ところで植物分類学上オホツツラフチとかアツツラフチとか云うが、ただツツラフチと云えばオホツツラフチのこと防己と云えば漢防己を指すべきと思ふ。成分としてはオホツツラフチはシノメニン、アツツラフチはトリロビンを含み兩者は違ふのであるから效用も違ふべきである。それで、防己の原植物はツツラフチ即ちオホツツラフチとし、その根を漢防己、その木部を木防己とすれば科学的にハッキリ説明出来る。シノメニンは根に含有量が多いから……。

防己の図は上の『証類本草』の興元府防己を模した者である(後略)

とよいつておられるし、何よりもかによりも之を臨床で木防己湯証に用いて確效があるのだから、この方は先ず間違ひがなかつたものとみてよいのではないかと思ふ。

ところで最後に防己には果して漢木の二種類があるのであるかといふ事になるのであるが、重校薬攷に、

漢木二種あり、余家漢防己を用ふ、按ずるに、防己の漢中に出る者之を漢防己と謂ふ、曩へは漢水遼五味子の如し、後世岐者之を二とし、其葉を木防己と謂ふ、誤れりと謂ふべし、木防己を試用するに、終に寸效なし、漢防己は能く水を治す、是に於て斷乎として之を用る(後略)

といひ、古方薬攷には、

按ずるに本草防己に漢木の二種あり。諸注紛々として定説なし。而して大平御覽に本草經を引いて曰く、木防己は漢中川谷に生ずと。千金方、繁期、陸贛丸方中に亦た云く、漢中木防己と。乃ち知る木防己一に漢防己と稱す。其意猶ほ蜀椒、川芎、辰砂、代赭の類の如きなるを。朱倪曰く、漢中の者を以て勝れりと爲す。故に方書に漢防己と稱す。吉益爲則曰く、木防己の漢中に出る者、之を漢防己と謂ふ。譬へば漢水、遼五味子の如きなり。後世岐つて之を二にし、其葉之を木防己と謂ふは誤れりと謂ふべしと。二説從ふべし。(後略)

と言つてゐるが、これらの説が最も當を得たものと善い得るのではないかと思ふ。(筆者、医学博士・千葉市登戸町三〇七)

チとし、その根を漢防己、その木部を木防己とすれば科学的にハッキリ説明出来る。シノメニンは根に含有量が多いから……。

漢薬店主・土田茂雄氏の談 市場に出まわつてゐるものは種類として木防己とオホツツラフチだが、色の黒いものと白いのがあり、黒い方は九州産で良いものとされており、白は信州産で劣るとされてゐる。然し黒いと云つても天然に黒いのか加工して黒いのかわからない。或人はオホツツラフチは茶の汁をかければ黒くなると思ふ。型は白い方が細く黒い方が太い。種類としては尙、漢防己といふのが有る。木防己はツル、漢防己は根を云うのではない。切断面には菊花紋がある。黒いのは苦が味が有り、白いのは苦が味のあるのを良品としてゐる。

漢薬師・植木方策氏の談 一方の方では山野にあるツツラフチの根を木防己と云い、切つて干すと薄黒い。然しツルは白い。根の方が黒い紋があり立派だ。つまり、根の方はよい木防己でツルの方は悪い木防己としてゐる。(本文中の己は已なり)

「漢方の臨床」発行 編集責任者

大塚敬節・馬場辰二・細野史郎

間中喜雄・森田幸門・矢数道明

編集担当者………氣賀林一